

第3回解体新書塾

公民館・地域自治のありようを問い直す
自治体間共同研究

記 録



主催：飯田市公民館

第3回解体新書塾「公民館・地域自治のあり方をとらえ直す自治体間共同研究」

1 開催の主旨

「地方」分権を進めようという国の政策動向の中で、住民自治力を高めるための行政の支援や新たな仕組みづくりを進めようとする動きが全国各地で取組みが始まっている。この中で住民自治を高めるための機関として公民館に改めて注目が集まる一方で、行政委員会である教育委員会から首長部局に補助執行する動きや、公民館を廃止し、コミュニティセンターとして再生させようとする動きなど首長の直接的な指示の元、住民自治の機関を支える仕組みを改変しようという動きが進んでいる。

飯田市の場合、民主主義の学校、郷土復興の拠点として戦後誕生した公民館の性格を色濃く残し、環境事業や観光事業など全国に先駆けた発信の土台として機能している。

住民自治力を高めるための基礎は、そこに暮らす住民自身が学ぶこと、そして個人としての学びから集団としての学びと活動に広がっていくことである。これを「学びあう地域づくり」ととらえ、日のような地域づくりを支える自治体の在り方を考えることをねらいとし、飯田型の公民館をモデルとして解体新書塾を実施する。

2 とき

平成 29 年 2 月 19 日(日)～20 日(月)

3 ところ

- (1) 研修及び交流 飯田市公民館（〒395-0085 飯田市吾妻町 139 番地 0265-22-1132）
- (2) 宿泊 シルクホテル旧館（〒395-0083 飯田市錦町 1-10 0265-23-8383）

4 日程

2 月 19 日(日)

13:50～15:10 飯田市公民館大会基調講演

島根県中山間地研究センター 政策統括監 藤山浩氏による講演

15:30～17:15 飯田市公民館大会の分科会に参加

18:00～20:00 飯田市公民館にて講師、飯田市理事者を囲んだ懇親会

2 月 20 日(月)

8:30～ 8:45 牧野光朗飯田市長あいさつ

8:50～ 9:20 講義Ⅰ「クロストーク 船木成記さん&木下巨一」

9:20～10:20 講義Ⅱ「学習する地域づくりと自治体職員の仕事」尼崎市顧問 船木成記氏

10:30～12:00 講義Ⅲ「振り返り」ファシリテータ 木下巨一

12:00～ 閉会

5 参加者

学びあう地域づくりを土台として地域自治の拡充を進めようとする自治体の職員

参加者の感想

第3回解体新書塾～公民館・地域自治のありようを問い直す自治体間共同研究

参加者の感想

平成29年2月19日(日)から20日(月)にかけて開催した第3回解体新書塾に参加いただいた皆さんから寄せられた感想を以下に紹介させていただきます。（順不同：敬称略）

飯田市民館 副館長 木下巨一

2月19日(日)の飯田市民館大会に併せて、第3回解体新書塾を開催しました。

「飯田型の公民館は自治の担い手が育つ場として大変活発に活動できています。しかし、飯田の公民館だけが元気なだけではガラパゴス化してしまいます。飯田型の公民館の仕組みや考え方を他地域に移転する取組が必要です。」こんな牧野光朗飯田市長の思いを受けて、解体新書塾はスタートしました。

飯田市民館大会に併せての実施は、昨年度に続いて2回目となります。本年度は、名古屋市(1人)、岡山県倉敷市(1人)、兵庫県尼崎市(5人)、石川県内灘町(4人)、松本市(7人)、木曽郡大桑村(4人)、長野県(1人)、飯田市(13人)と5県から38人の参加がありました。

初日は公民館大会終了後、基調講演講師の藤山浩さんと、解体新書塾講師で尼崎市顧問の船木成記さんを囲んだ懇親会を行いました。

20日(月)は、飯田市民館大会の振り返りを行った後、船木さんによる講演「学習する地域づくりと自治体職員の仕事」をお聞きしました。

船木さんの講演の中で印象的なお話をご紹介します。

【ソーシャル・マーケティングとは】

船木さんの本籍は(株)博報堂で、専門はソーシャル・マーケティングです。これは関係性の回復、あるいはつながりのデザイン。今の時代や社会に必要なことを、過去からの積み重ねの中から見つけだし編み上げていく仕事だそうです。取組の成果が上がるためには、取組に関わる人たちの心が動き、自律的自発的な行動が生まれることが何よりも大切です。つまり取組を通して人々が学び育っていくプロセスそのものです。船木さんの仕事は自治体経営や社会教育に関わる私たちにとっても大変大事な視点です。

【そのマチを好きな人に会おうとそのマチを好きになる】

ソーシャル・マーケティングによるまちづくりに関わる中で、船木さんは長崎市で営まれている長崎さるくに出会いました。「さるく」とは、長崎弁でまちをぶらぶら歩くという意味だそうです。この取組は観光客のガイドの仕事なのですが、大事なのは案内役がマチのことを愛し、その気持ちを伝えることができること。船木さんはこの取組から、「そのマチを好きな人に会おうとそのマチを好きになる」ということを学んだそうです。

【学習する地域づくり～課題先進都市から課題解決先進都市へ】

現在顧問を務められている尼崎市は、公害、在日外国人との共生、労働者など様々な課題を抱えた都市です。人口減少も顕著で、現在はピーク時の55万人から10万人も減少した45万人です。そのために尼崎の財政は大変厳しく、限られた財源の中で十分な市民サービスが提供できないという悩みを抱えている都市です。しかし尼崎には課題に対して真剣に向き合ってきた多くの人々と取組があり、それはすなわち学びです。そういう課題に向き合い学んだ取組を行政職員が掘り起こし、市民同士、市民と行政

をつなげていくことを通して、課題先進都市と言われた尼崎市を、課題解決先進都市としていくための大事な視点が「学習する地域づくり」です。

【学ぶということは常に問いを持つということ】

公民館大会基調講演講師の藤本さんのお話は、数字に裏付けられた大変具体的でわかりやすい話でした。しかし、「〇〇すれば、〇〇ができる」というお話に対して、聞く側は、本当にそうなのだろうか、という問いを持つことが大事です。これは自分自身が主体的に物事の良し悪しを考えているのか、という投げかけととらえさせていただきます。

【アボイデッドコストという視点で考えてみる】

アボイデッドコストとは回避可能なコストを意味します。アメリカの社会起業家であるロザンヌ・ハガティさんは、代表を務めるNPO法人コモングラウンドが取組んだ、ホームレス支援の取組みを例としたお話です。ロザンヌさんは、ニューヨークの中古ホテルを買い取り、そのホテルをリニューアルし、ホームレスの住まいとして提供する事業に取組みました。この取組で既に2000室以上をホームレスに提供した結果、最初に事業を起こしたタイムズ・スクウェアではホームレスが87%も減少し、殺人事件は0となり、窃盗事件も80%減少しました。彼女が使った費用は1万5千ドル、それに対して彼らを病院に収容すれば年40万ドル、刑務所に収容すれば年6万ドルの経費が掛かることと比較すると、驚くほど少ない経費で済んだだけでなく、貧困→犯罪→貧困…という悪循環を断つ、根本的な解決が実現したという話です。自治体の仕事を進める上でとても示唆的なお話です。

飯田市民館大会への参加と、大会講師との交流、そして翌日の振り返り、という組み立てによる解体新書塾の試みを、ぜひ次年度にもつなげてほしいと期待しています。

倉敷市 中桐史雄

3年前、公民館－CLC国際会議が開催される前に公民館の地域担当職員として本市社会教育部門の管理職職員を対象に研修を実施した際、飯田市竜丘公民館開館式での祝辞の言葉（「町村行政が村を守る父親だとすれば、公民館の運営は村を育つる慈母である」）を引用し反響を得たことが飯田型公民館に強く関心を持つきっかけになった。**「主体である住民が力量をつける営みを支えることが自治体職員の役割」**と語られた尼崎集会解体新書塾分科会に参加したこと、また昨年5月にスタッフとして関わったG7教育大臣会合で採択された「倉敷宣言」が全体として学校教育を担う教職員の資質向上に主眼を置いたもので、（ESDの推進が明記されたがその前提としての）社会教育の推進が盛り込まれなかったことに違和感を覚え、自治体職員として今一度社会教育の原点に立ち返る必要性を感じ、飯田型公民館に学びたいと思い、今回初めて解体新書塾に参加した。

飯田市の事例とは地域担当職員としての私自身の経験と重なる所、尼崎市の事例とは「学習する地域」の実践者としての本市と重なる所（高度成長期の公害問題を起因とした環境学習）と照らし合わせながら、**公民館職員が「専門性を獲得することの必要性」について特に心に留めながら講師の話や参加者の意見に耳を傾け、飯田型公民館では力量形成の場として主事会が重要な役割を担い、公民館主事が高い専門性を保ちながら、切実な課題に立ち向かう住民が自ら学びを組織し作り上げていくプロセスを促し支えていることを学んだ。**その育ちを寄り添い支え、課題把握のプロセスを深めつつ、まちをつくり変えていくプロセスを学びと捉えてその学びを支援する所に公民館職員のあるべき姿を見出すとするなら、公民館大会分科会での対話によって垣間見た、**飯田市のような「力のある住民」が育っている自治体だからこそ、その学びとエンパワメントを支える職員の高い専門性が求められていくことにつながるように感じた。**

そうした中で子どもから大人までの実践を通じたエンパワメントを一人ひとりに寄り添いながらコミュニケーションを通じて支えていく、という経験値を高め育んできた飯田市民館主事が住民との日常の対話の中でどう質の高い仕事を見出しているか、そもそもそのような質の高い仕事を見出さない限り住民の要求水準がそのレベルに達しないので、それをどう乗り越えているのか、ということ进行今回窺い知ることではできなかったが、単に知識としてではなく実感としてその本質に迫るためには、公民館主事の実践の現場や力量形成の場としての主事会を中長期に渡って共有し学びの循環を絶えず意識することが最善の策であり、その意味ではこれから尼崎市が取り組まれる長期実践型のインターンシップが有効な手立ての一つになるように思った。

一方で、都市型課題先進都市として（既に人口減少を迎える等）切実な課題に直面している尼崎市における「みんなの尼崎大学」は地域の課題解決に向けた大きな可能性を秘めており、特に船木氏の講演を通じて、飯田市とのこれまでの交流や学び、新たな学び合いの場としての「みんなの尼崎大学」、そして今後のインターンシップとが相まっての「都市型課題解決先進都市」の実現への強い決意を感じ取ることができた。

船木氏が述べた「学習や学びを自己目的化せず、自分たちの日常を見つめる目としての学びをもう一度しっかり取り戻す」ことが、本質に通じる感覚（≡全体を俯瞰する力、問いをしっかりと立てて物事や社会を捉える力）を育み、そのことが自治体を住民本位につくりかえるための、言い換えると団体自治の機関としての自治体を住民自治の力で住民本位のものにつくりなおす力を育むことにつながるように感じた。社会教育、とりわけ公民館は本来そのための行政内部にビルドインされた機関である筈だが、このことは今回の共同研究で触れられず、また私自身問題提起することができず、その点について飯田市民館職員との対話の場が持てなかったことが今回の課題であり、大いに悔やまれる点でもある。

尼崎市の多様性に溢れた職員は私自身のこれまでの交流や学びの中で認識していた所だが、個人の気付きをまちのみんなの願いに変えられないか、という問いにどう向き合い取り組むか、そのことを考える前提としての多種多様な行政職員の存在、社会インパクトに着目して福祉分野で実践された「アボイデッド・コスト」的発想をソーシャル・キャピタルが蓄積された社会教育の現場（または「公民館的なもの」）に取り入れ昇華させると共に、その成果を評価する仕組み（例えば SROI 的手法）の必要性を感じた。その意味でも飯田市・尼崎市・松本市を中心とした実践者と分野横断的な研究者との対話により、今日的な社会教育のあり方を問う本共同研究が果たす役割は大きい。社会教育（または「公民館的なもの」）を通じて新たな自治体職員像、そして未来の住民像を描くためにも今後の動向に注視し、自らの足元のまちづくりに活かしていきたい。

尼崎市 桂山智哉

2 日間に亘り、貴重な勉強の場をいただきましてありがとうございました。1 日目の分科会では、公民館で地域の方とともに協働しながら学びの機会を作り出している職員の方と、公民館活動を楽しみながら人生を深めておられる地域住民の方とともに意見交換をさせていただきました。特に印象に残っているのは、地域の伝統料理を後世に繋ごうと料理クラブを結成されているグループの皆さんの事例発表でした。地元の高校生とともにお祭りや文化祭で郷土料理の屋台を出店するなど、世代間交流から生まれた絆や新たな発見をいきいきと発表しておられました。発表についても「みんなに知ってほしい」という思いから当日に向けて幾度も練習して来られたのがその姿勢から伝わり、公民館と公民館を取り巻く環境や人間関係を本当に大切にしておられるのだろうなと感じ、あたたかい気持ちになりました。どの参加者もみな地域活動を楽しんでおられる様子が分かり、この熱気を尼崎でも生み出したいと思わせら

れました。

2 日目は、1 日目の振り返りと共有と、尼崎市顧問からのお話がありました。尼崎市顧問からは、尼崎市の現状と課題の話、課題に対してどう問いを立てるのかという考え方や向き合い方の一例、尼崎の事例紹介、行政職員のマチへの関り方についてのお話などがありました。普段私たちが職員研修等で聞かせて頂く話から、普段尼崎市と交流のない遠方の皆様がどうお感じになるかを知る、良い機会になりました。事例紹介や職員交流を通じ、飯田市や松本市、その他県外参加の方から「尼崎にはパワーがあると思う」という感想を多く頂きました。それは私自身も普段から感じているところで、遠方の方にもそう感じて頂けることがすごく嬉しかったのと同時に、改めて尼崎市の持つ可能性を強く感じました。尼崎市では「学習する地域」をめざして地域活動の活性化と、協働による自治のまちづくりをめざしています。既にスタートしている、市内全域を大学のキャンパスに見立てて各地で学びの場をまきおこす事業「みんなの尼崎大学」や各種公民館活動を活性化させ、尼崎に「学び」の風土を根付かせて、課題解決先進都市として飛躍していきたいと思います。

尼崎市 宇高竜哉

今回は貴重な機会をいただきありがとうございました。基調講演では、中山間地域が抱えている課題等を学ぶ機会となりました。また分科会では、実際に公民館活動等をされている住民の方々との意見交換を行う中で、普段の活動でのやりがいや課題等、さまざまな話を聞くことができました。私自身、以前に市民活動を支援する業務に携わっていたことがあり、地域で活動している方々から後継者や人手不足の課題を聞いたことがありましたが、今回の意見交換においても活動の継続の難しさや人手不足についての話があがり、住んでいる地域は違えども共通する点が結構あるのだと感じました。あと、今回意見交換をした住民の方々が 40 代など働き盛りの現役世代の方が多かったことも印象的でした。

石川県内灘町大学公民館 館長 行野修一

昨年に引き続き 2 回目の参加になります。

今回は、町会長、公民館長、副館長、主事の 4 名で参加させていただきました。

私たちの内灘町は金沢市の海側に隣接する小さな町で、金沢のベッドタウンとして形成された町です。人口約 27,000 人の町で、各町会に公民館があり、計 17 の公民館があります。東京大学との共同研究をきっかけに、大学の先生から、飯田市が素晴らしい公民館活動を行っていることを聞き、昨年度から視察や研修に伺わさせていただいております。

昨年同様に今回の大会でも、飯田市の皆さんの公民館に対する熱い思いを感じることができました。大会に参加している皆さんがそれぞれ「公民館をやる！」という思いで活動していることに改めて感心した次第です。

私の参加した分科会は「世代間のつながり」をテーマにした分科会でしたが、中学生も参加しており、まさに世代間のつながりがうまくいっている様子を見ることができました。また、その中学生が積極的に自分の意見を話していたことに本当に感心しました。

私たちの町では、中高生になると公民館の活動には全く参加していないのが実情で、40 歳以下の若者の参加もかなり減少している状況です。このままでは、高齢化した特定の人だけで公民館を運営しなければならないのではないかと危機感を抱くこともあります。

今回の分科会で、大人の都合で考えるのではなく、「中高生や若者にとって何が良いのか？」、そして彼らが活躍できる場所を作ることが重要だという話がありました。確かに、これまでは、大人が計画し

て若者に協力させるという形態の活動が多かったような気がします。もう一度原点に戻って、それぞれの年代にとって何が良いのかを考えてみたいと思います。

いずれにしても、すべての年代の人が「自分の公民館」として利用できる公民館にしたいと思っています。

また、飯田市の皆さんの活動状況をお聞きする中で、「あ、こういう方法もあるんだ」などとヒントが得られるようなお話も多くありました。これを、私たちの今後の活動に生かして行きたいと思っています。

今回も参加させていただきましてありがとうございました。

大桑村社会福祉協議会 中田陽一

「地方は消滅する論」にあきれ、これに抗うべき、地方に住む私たちにとって藤山さんのお話は、私たちが取りうる行動の手掛かりを知る貴重な機会でした。

また、第4分科会に参加しましたが、NPO法人「よつば」の時代を先取りし、地域を巻き込んだ活動、「年輪会」における高齢者の出番確保は大変参考になりました。

現在業務している福祉の分野では、地域における福祉関係の課題も福祉関係者だけでは解決できないと感じています。

公民館、地域組織、ボランティアなどなど地域に住む人々がどのように枠を超えて活動していけるのか、さらに考えさせられました。

ありがとうございました。

松本市から参加された皆さんからの感想

(A)

過日松本市で開催された研究集会に、飯田市から大勢ご参加いただきありがとうございました。二日目のみの参加で申し訳なかったですが、参加された皆さんの心意気を感じました。

長野県の公民館は、発足当初より住民の学習の場として、戦後の復興期、経済成長期等々、変遷する時代の中で、所管する地域の特性を鑑みながら、時代に応じた住みよい地域づくりを住民とともに進めてきました。

現在、牧野飯田市長の言われる人口減少、少子高齢化等の右肩下がりの時代を迎え、厳しい行財政状況にありますが、各自治体また公民館が、学びを通して互いに知恵を出し切磋琢磨しあいながら、住民とともに公民館活動、地域づくり活動を展開していかなければならないと、改めて考える機会となりました。

(B)

最初の振り返りを聞き、「前日から参加できれば」と思いましたが、すでに、19日は地区行事が入っており残念に思いました。分科会の振り返りは、何処でも同じ様な悩み等を抱えていると感じました(若者・こども・地域文化・高齢者)。

社会の常識を疑ってみることが、地域の持続可能性をもたらす切り口がある・・・何事も一つの方角の見方をせず、多方面からの見方、その奥に潜んでいるものを、深く見つめることが大切ということが良くわかりました。 尼崎大学・・・いろいろな発想があって参考になると感じました。

地域のために、公民館が人と人を繋ぎながらやっていくことの大切さを再確認しました。

(C)

＜大会等、全体的な感想など＞

飯田市民館大会は、各地区から公民館委員が参加し、大会終了後には地区毎で反省会・慰労会を開催していると伺いました。全国的に開催することが目的化する大会も見受けられる中、あくまで「大会は日頃の活動の通過点であり、大会で学び得たものを各地区の住民活動へつなげる」という明確な意図が見えた気がします。「地域をつくる→そのためには、地域づくりを住民の手で進める→必要な担い手をつくる→そのための通過点（共有の場、育ちの場のひとつ）として大会をつくり、開催する」といった印象です。

また、主事（職員）の皆さんも、「住民に巻き込まれている感」満載でした。ただし、受け身で巻き込まれるのではなく、さながら「地域」という戦場へ向かう兵士といった感じでしょうか。飯田市で暮らす市民として、行政職員として「全ての人にとって住みよい地域社会を創る」という命題をクリアするために、最前線で戦う「コミュニティの防人」です。そのために、主事研修会で得る「知識」と、地域のなかで住民と共に実践を通じて学び得る「体験」を、サイクル的に繰り返す中で、各主事が必要なスキル（武器）を身に付けているという印象を持ちました。

＜解体新書塾を通じて、改めて学び、感じた点＞

1 夢や希望を実現させるためにも、確実な一歩を踏み出すこと

住民のなかには、「よくわからない漠然とした不安」や、「いつ実現するのかかわからない夢・希望」があります。地域づくりにおいて、不安を可視化することは、比較的初期段階で行われますが、夢や希望（目標）を具現化するための行動が、イマイチ進まないことがあります。地域のなかにある資源を共有し、その資源を「どのように行動へシンクロ出来るのか」を捉えた、一歩を踏み出す重要性を感じました。実現できない行動ではなく、小さくても「出来る確実な一歩を」。

2 問題把握から課題設定への重要性

問題を把握するなかで、それぞれのケースに応じた課題設定（task）をする部分が、ゴールへ向かう上では、最も時間を割き、関係者と共有することの重要性を感じました。

3 協働による地域づくりは、「問題ありき」よりも、「夢や希望」と「何に向けて、どのようにするのか」がポイント

現在の地域づくりは、「まず協働すること」「問題を探すこと」といった印象を持ちますが、協働することを目的化しているのではないかな？また、問題とはその先の「あるべき姿」と比較してのギャップから生じるはずなのに、それを共有する前に「まずは問題」といった感じになってはいないだろうか？と、時々思っています。

やはり、地域づくりとは、まずいろいろな人たちが共に話し合うなかで夢や希望を語り合う。そこで、「あるべき姿（夢や希望）」と現実とのギャップをみるなかで、実現へ向けた課題設定（task）を行う。そして、関係する個々が自治（意思）を持ちながら実践していくことであると感じました。

4 その他（感じたキーワード等）

(1) 本当に伝えたい人へ、伝えたいことを、伝えること

職務上、誰でもわかるような、内容に漏れがないような書類やチラシを作りがちです。特に、チラシについては民間の方から「面白くない、参加する気にならない」と言われたこともあり、改めて反省です。

(2) 「学び」や「学びの場」を目的化するのではなく、その先の目的や本質を常に捉え・見続ける。

目先のコストではなく、全体像を捉えるなかで、先にある「波及するコスト」を POINT に!!

(3) 自分の人生を語ることが、歴史をつなげること

(4) 個人の気づきを、みんなの「願い」へ転換すること

(D)

二日目に参加させていただきました。主催者飯田市公民館の皆様方に、厚く感謝を申し上げます。さて、今回の解体新書塾参加の感想、意見を4点申し上げます。

- 1 当初、牧野飯田市長様のイノベーションに関わる講義を聞くことができず、残念な思いをしましたが、前日の全体会・分科会の振り返りを実施していただき、すんなり後段の講義に入ることができました。主催者の会運営の配慮に対しまして、心から御礼申し上げます。
- 2 学び、理解し、共有し、行動するなかで大切なスキルとなる「インプット→スループット→アウトプット」の流れの中で、インプットされた情報を自分のものとし、どんな場でも住民を巻き込んでの協働の場「スループット」の重要性を学ぶことができました。
- 3 地域住民の地域活動への参加意識を高めるためにも、公民館活動に従事するものとして、学びのなかで講師の話を鵜呑みにせず、常に「疑ってみる、問うてみる」視点を持つことの大切さ、そして活動にあたってチェンジエージェントの役割を担えるよう、日頃から心得たいと心に刻みました。
- 4 今後、実践的な学習を含め、次のステップへ進められる学習機会を常に持ちたい思いになりました。

長野県 石神直樹

まず、飯田市の公民館活動を常にリードし、発信されてこられた木下 巨一副館長に敬意を表させて頂きたいです。

思い返せば、約20年前に飯田市で開催された地域づくりの大会において、市職員のキーパーソン 高橋寛治さんや木下さん、「ひさかた風土舎」長谷部三弘さん、そして故後藤総一郎先生によるお話を聞いて受けた衝撃感は忘れられません。住民による自治を基本に、地域づくりに独自の哲学や手法を持って真摯に取り組む人と自治体があるという発見でした。以後、私にとっても飯田は、目が離せない“憧れの地”となり、現在も刺激と学びを受け続けております。

2013年2月に木下さんを中心に開催された「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す研究集会」では、全国からの参加者の方々とともに、戦後の民主主義の担い手としての公民館の原則に則った飯田市の経過と事例を改めて学び、飯田が全国の公民館活動の最先進地であることを改めて確認しました。飯田市の「公民館」活動が、全国発の市民ファンドによる太陽光発電事業（おひさま進歩エネルギー）を生み出し、あるいは、JICA「参加型地域社会開発（PLSD）」と連携し、住民交流を通じてフィリピン・レガスピ市に“輸出”される、というニュースも驚きでした。（自分の大学でのゼミのテーマが南北問題であったため、先進国～途上国・都市～農村の課題がつながり、その鍵が、地域単位の公民館活動にある示唆と可能性は、目からウロコでありました。）

今回、分科会は第6「ムトスの心で、地域に活動の輪を広げよう」に参加させていただき、A～Gの7つのグループ内による討論と発表がありましたが、100人を超える参加者の皆さんそれぞれが、ご自身のかけがえのない活動の体験から、熱く語られる景色を見るだけで、これぞ飯田の姿と、心が動かされました。Gグループでは、「ムトス」の精神、「～せむとす」自分がやってみたいこと、自分の内から湧

き出てくることを地域で実現する、という精神の大事さについてのご発言があったり、公民館同志バラバラではなく、さらに横の自由な交流や情報共有、つながった動きで、飯田市全体をもっと盛り上げよう、といったご意見が心に残りました。

基調講演での藤山浩先生の「人口とは、人生の数」、船木成記先生の「個人の気づき（本気）と語り合う学習で日本一、人が成長する組織（まち）」、をめざす尼崎市の事例、そして、「ムトス」という、人の生き方の本質を問う合言葉で人が動いているまち「飯田市」。今回も多くを学ばされ、自分を問い直されるような豊かな内容をありがとうございました。私も他所からの者ですが、自分のできる一歩から、飯田に関わりたいと思います。

飯田市龍江 平澤 健

今回の解体新書塾は初日の懇親会のみ参加でしたが、今自分最も機会を得たい、他分野の方々の話を聞き意見を交わしできれば一杯やりながらという「他流試合」ができて嬉しいひと時でした。（延長戦は日付が変わるまで）

今回も様々な場所や立場の方々、普段こうした話ができない同僚らのとの語らひは、これからの地域における課題と向き合う際、公民館の果たす役割について改めて感じると共に、「自らも」と意思を固める場となりました。

自分は行政に携わりつつも、住む地域の公民館にて活動する一市民という立場で参加しています。公民館主事は…というか、市の職員は「黒子」や「裏方」であるべきではとの考えもありますが、もはや地域における課題解決はそこに住む住民自らが主体となって取り組まねばならないこの時に、裏も表もヘッタクレもあるか！気付いた人が声を挙げ、動かない限りは変わらないのではないかと感じています。

また、自分が地方行政に関わる中で「国や県が推し進めているから」として実施してきたことが、「??」という事例に遭遇し大いに考えを改めつつあります。残念ながら公民館ではなかったものの、地域を知るために取り組んだ学びの中で見えてきた事であり、いかに普段から「疑問を抱き、学習し考える」という機会が少ない事に危機感を募らせています。

行政職員ではあるけれど、住民の一人として自ら地域における課題や疑問について向き合うための学びを創出し、一緒に考え取り組んでいく。その中で生まれた住民グループの中で、リーダーではなく「行政の事についてちょっと詳しい部門のひと」として活動できたら…そう感じた解体新書塾でした。

飯田市民館 氏原理恵子

最近このような研修会に参加するたびに、私は胸が苦しくなります。

なぜなら、日々の仕事への向き合い方、さらには私自身の生き方そのものについて、「これでよいのか？」を問われる時間を持つことになり、後悔の念に苛まれたり、確固たる信念を持ちえない無力な自分と向き合うことになるから。しかし、それは同時にこの苦しみを乗り越え、私自身が成長する糧となると考えれば、希望に変わります。これまで、じっくり自身を振り返る時間を持とうとしてこなかった私が、今更ながら、このような機会に恵まれることに感謝したいと思います。

さらには、船木さんがおっしゃる学習する組織・集団をめざすためには、一人ひとりが課題意識を持ち成長し続けること、また個々の成長にとどめることなく皆が同じ目標に向かえるよう対話し続けることを大切にし、私自身が組織の一員としての責任を果たしていきたいと思います。

今回のように、飯田市民館大会に他市町村から参加いただき交流すること、様々な視点でご意見を

頂戴できることは、私自身はもちろんのこと、この地域であたり前のこととして日々活動されている住民の皆さんの刺激となっています。また、この大会の企画・組立、大会そのものの位置づけを客観視することのできる貴重な機会となっており、次年度以降の大会の企画につなげていきたいと思います。ありがとうございました。

飯田市公民館 木下慎一郎

解体新書塾に参加して、特に「ドキッ」とさせられた点が二つありました。

- ・2日目の冒頭、船木さんから前日の市公大会の基調講演について

「1世帯や2世帯の移住で本当に地域が存続できるのか。自分の頭で疑って考えてみてください」とというような趣旨の話がありました。

日々忙しい毎日ですが、「これって本当にこれでいいの？」というような「問いかけ」の大切さを改めて認識しました。

・船木さんの講演の「シチズンシップの育まれるまち」の話の中で、「そのマチを好きな人に会おうとそのマチを好きになる」という話がありました。この地域の人の往来が盛んになって賑わってほしいという気持ちはありますが、「そもそも自分が「良いところも悪いところも含めて、本当にこのマチを好きになれるのか」ということを問われているようで複雑な気持ちになりました。

最後に、興味をかきたてるような組み立てをされている「みんなの尼崎大学」の話を聞いて、専門委員会を軸に今までの仕組みに支えられている飯田にも見習うべき点があると感じました。

飯田市公民館 小島一人

毎回参加して思うことは、僕にとってこの解体新書塾が、自分の可能性を大きく広げてくれる機会だということ。それは、仕事としてというよりもむしろ、自分自身の人間性に関わる部分だ。

僕個人の考えとしては、何かを成そうとした時（それはどんなに些細なことでも）、そこには役割とか手法といったパーシャルなものではなく、人としての私の在り方（等身大の私）が投影されると思っている。そして、解体新書塾の中で提起される話題や、そこに集まる参加者との出会いは、その部分を刺激してくれる。まさに、「絵画を読み取る力をつけるには、絵画を勉強するよりも、自分自身が成長することが一番の近道」だし、「学び」とはそういうことなんだと思う。

この意味で、今回の「問いを立てる」という話には2つの側面があったと思う。1つは、自分が関わる物事（自分の外のこと）に対する問い。もう1つは、そのために求められる私の姿、「自分自身の内面」に対するそれだ。前者はとても具体的なもの、後者はとても抽象的なものだ。

研修などの機会は、主として前者の話に傾倒することが多いと思う（具体的話をしなければ何も伝わらないので、それは当然だが）。例えば、今回の研修の中にあつた、運動会に人が集まらないという悩みに対する桂山さんの「他地区から人を呼んでみてはどうか」という発言をどう捉え、そこに何を見出すことができるかという話。インプットとアウトプットの間にあるプロセスを大切にし、そこにどう働きかけどういう変化が起こってきたのか（スループット）を見るという話。貧困問題へのアプローチが犯罪率等の減少に寄与するという例から、アボイデッド・コストという視点から物事を見てアプローチするという話。挙げればキリがないが、どれも示唆に富んだ話だった。

しかし、ここから僕たちが考えるべきは後者、つまり、どのように「自分自身」に対する問いを持つかということだと思う。物事に出会った時に、その本当の意味、深いところまでを感じ、受け止めることができる自分であるのか（固定観念からの脱却・個々人の深まり）。そうなるために、自分の価値観、

感覚、考え方、視点をどうやって磨くのか。また、独りよがりの解釈、考えに偏らないような自分であるのか、そうなるためにどうすればいいのか（逸脱しないバランス感覚・仲間との関係性）。

僕自身はこんなことを考えながら、今回の研修を受けていた。これが僕の発信だ。今度はここから、みんなは何を感じていたのかを聞きたい。バランスをとっていくとは、やはり人と話すしかないと思う。やっぱり振り返りがとても大切だ。

橋南公民館 菅沼 美津子

今まで何回も船木さんのお話はお聞きしていますが、船木さんのお話は今回もやはり自分に突き刺さるものばかりでした。「若者が公民館に来ないと言うけれど、『若者と公民館』ではなく、『若者と大人』の関係。公民館が変わらなければ変わらない。」「学習や学びを目的化しない。実践のための学びが大切。」「行政がしていることは『対話して市民の困り事に気付く』のではなく『決まったことを市民に伝える』ことである。」「協働の本質は『何をやるのか』ではなく『どうやるか』を住民と一緒に考えることである」などなど…。

長く同じ環境で仕事をしていると、その環境に慣れてしまい、「これはこういうものだから」と、日々の自分の仕事について別の角度から見たり、深く考えたりすることをしなくなり、視野が狭くなりがちです。今回のように、外部の様々な視点を持つ人達から話を聞くことは、私にとって今の自分の仕事の仕方や住民の皆さんとの向き合い方を改めて考える良い機会になっていると感じます。自分のベクトルの向いている方向が間違っていないか、確認する作業になっているのかな、と思っています。

今回も他自治体の職員の方と話をする機会がありました。「飯田に追いつけ追い越せ」で貪欲に学ぼうとする姿勢を見て、私達も負けなように向上心を持って自分を磨いていかなければ、追い越され、置いていかれてしまうのではないかと感じました。（焦り過ぎは良くないと思いますが）今回のような他市町村の方達との研修会や学習会もそうですが、毎月行っている主事会の研修会やプロジェクトなど一つ一つについて、自分にとってもっと意味あるものにしていく必要性を感じました。

東野公民館 熊谷健太郎

市公大会の分科会の振り返りの時間で、第一分科会の助言者として参加いただいていた船木さんより講評をいただき、分科会の組み立ての難しさ、何事においても曖昧な理解で臨んではいけないということを感じました。

船木さんの講義のなかで「社会の常識を疑うことにこそ、地域の持続可能性がもたらされる切り口がある」という話がありました。今の世の中は、インターネットが普及し、情報が簡単に得られるようになっています。いろんな情報を鵜呑みにして、分かったような気になってしまうこともあると思います。自分の地区での活動や研修を通して勉強を続けていくなかで、自分の頭で考え、自分なりの答えを持って動いていくことが大切だと改めて感じました。

最後まで参加できず残念でしたが、市公大会から解体新書塾で学んだことを、できるところから取り入れていきたいと思います。

座光寺公民館 三ツ井洋樹

船木さんより、「学習する地域づくりと自治体職員の仕事」という演題でお話をお聞きし、船木さんの言葉の一つ一つから、行政職員としての姿勢だけではなく、これまでの自分自身の人生を振り返りながら、人としての姿勢について改めて考え直し、今後の公民館の役割を考えていくための良い機会とな

った。

◎「地域の輪郭をなぞる」

船木さんが現在顧問を努められている尼崎市では、歴史的に「学び」に対する土台があり、「みんなの尼崎大学」の活動は、その地域の輪郭をなぞったにすぎないということ。主事会研修で松下拡さんから「地域を歩くことで地域の課題が見えてくる」というお話があったように、まずは自ら地域について学び、魅力や課題などが見えてきたところで、それぞれに真剣に向き合っていくことが「地域の輪郭をなぞる」取り組みになると感じた。これは、「人生」においても同じことが言えて、自分自身の人生はどこで輪郭を与えられたのか、改めて見つめ直す言葉であった。

◎「そのマチを好きな人に出会ふとそのマチを好きになる」

船木さんのまちづくりにおける定理としてのお話があった。地域への愛着形成や定住促進など、公民館としても様々な取り組みをしていかななくてはならないが、「そのマチを好きな人に出会ふとそのマチを好きになる」という、熱を持った人との出会いを大切に考えていければと思った。

◎インプット・アウトプット・スループット

地域の取り組みの「インプット→アウトプット→・・・」に加え、スループットの部分を、行政職員が担うことが、協働プロセスの中で最も重要であると感じた。

解体新書塾のような研修の機会は非常に大切で、特に、その内容から「自分はどうするか？」と、考えることが重要だと感じた。どのような話題でも他人事にせず、しっかり向き合う姿勢で居続けることが今後の行政職員としては大切だと思う。

下久堅公民館 近藤みのり

船木さんの講演の中で、「コミュニケーション ファースト」という言葉が挙げられていましたが、何のために法律があるのか。何のためにこの事業があるのか。困りごとに気づくことが大切というお話が一番印象に残りました。

気づいた問題が、周りの人にも「大事だよね」と共感してもらうことが大切であり、その繋ぎ役が公民館であり、主事の役目ではないかと改めて考える機会になりました。何をやるかではなく、どうやるかを一緒に考えていくことが大切であるという言葉に、今までのやり方や意識について考えさせられました。

また、尼崎市の職員の方から市公大会の分科会に参加してどう思ったか、尼崎市での取り組み等々、お話を聞くことができ、刺激にもなりましたし、勉強にもなりました。

竜丘公民館 熊谷隆幸

公民館主事になってから、「竜丘のために」という軸を自分の中に据えて取り組んできて、それなりに住民の声を聞き、課題を考え、委員さんをはじめとした住民の皆さんと取り組んできた。しかし今年度、松下拡さんをはじめ、色々な方のお話を聞いている内に、自分に取り組んできたことはまだまだ表面的なところだと感じるようになった。もっと住民の方一人一人に真剣に向き合い、懐に入って行かなければ、「暗い感情」と表現されていた部分、生活につながる課題に気付いていけないと感じている。

今回の船木さんの話からも、コミュニケーションの大事さや、「学び」の捉え方など、もう一歩踏み込む必要性を感じた。「自発的にやる気になるようにプロモーションする」というお話もあったが、まずは住民の方々としっかりと向き合う中で、一緒にそれぞれの生活を見つめ直し、学びを創りだしていきたいと思う。

飯田市三穂公民館 小山真由子

学習することは目の前にある情報や物事を疑うことから始まる。ソーシャルコストとアボイデッドコストのホームレス支援のお話の中では、物事は必ず全体で1つの流れを作っている。船木さんのおはなしの中でこの2点が印象に残っております。

住民と対話するとき、その人の一面だけを見てしまっていないか。この人が今いる環境・状態・過去の出来事が今のその人を創っている。もしかしたらそこに地域の課題になりえる個人の課題が隠れているのではないか。疑うことは決して批判的な目を持つことではなく、1人1人の言葉を真摯に聞き、それを受け止め、解釈し、その言葉の意味や背景からその人のことを考える、そのような学習を自分自身ができているのか考えることではないかと感じた。

千代公民館 新井康平

基調講演の藤山さんの話に対する船木さんの批評「専門家のこーゆー視点の話としてきくことが大事なのであって、アジェンション（扇動・あおり）が強かった。受け入れる側の受け入れ態勢をどう作っていくかが大事であって、その話が無かったからつまらなかった」は、俯瞰でちゃんと観て、分析しており、そういったモノの見方、考え方を真似しようと思いました。自分の10mくらい後ろにもう一人の自分を置いて、その後ろにいる自分の視点を大事に、考えるようにして学習内容や住民へ投げかける言葉をよく選んでいきたいと思いました。

鼎公民館 平沢真一

今回、船木さんのお話を初めてお伺いしましたが刺さる言葉ばかりでした。物事を俯瞰してみると、与えられた情報を鵜呑みにして飲み込んでしまわないというお話しに正直どきっとしました。主事として物事をどのようにとらえていくのか、その前に当たり前のようにある情報や提供されたことに対してただ受け入れのではなく、常に自身なりの考えを持ってとらえていかなければならないと強く感じました。主事として物事に対し問いかけの意識をもつこと、自分なりの考えを整理し答えをもつことの必要性を改めて感じる機会になりました。

肝となるまとめの部分に参加できず退席してしまい残念でしたが、市公大会から解体新書塾でのまとめまでの参加を通じて得た学びを地域に結び付けていきたいと思います。

南信濃公民館 林優一郎

解体新書塾の導入では前日開催された飯田市公民館大会の振り返りから行われた。第1分科会においては若者を切り口に分科会を行ったが、助言者として船木さんにも参加いただいた。「高校生はコマではない。一住民であることには変わらない」とはっきり言われ、事例にひっぱられ、高校生”を”または高校生”が”にGWが進んでいったこと、この分科会のねらいが事例と結びついてしっかり参加者に持ち帰ってもらう事ができたのか企画側として反省すべき点があったことを感じた。もちろんGWの中では、高校生”も”という発言は出てきてはいるが、全体としてねらった所には至っていない感じがしている。そう言った意味では分科会総括において船木さんのおっしゃられた言葉は分科会が曖昧に終わらず、参加者にも伝わったことがあるのではとプラスに捉えている。

講義においては、尼崎の事例を元にお話しをお聞きした。印象的だったキーワードは、社会を編集する、スループット、プロセスのデザインである。

ゼロからではなく過去の経験・蓄積・学びを足し算や掛け算しながら作り上げていくことの大切さや、

行政職員として陥りがちな補助メニューを作り上げるとことに力を注ぎ、本来大切な過程の部分に目を向けていない点など、自らの今までの立場を改めて振り返る機会となった。

しかしながらこれらは講義を聞いたからと言ってすぐできることではないと感じる。現場で闇雲に対話するのではなく、主事として思いや課題などを感じながら対話をしなければ前には進まないと思う。この講義を頭に置きつつ、これを自分なりに咀嚼し、現場での実践に繋げていくことが大切なことではないだろうか。地域の形が様々であり、そこに暮らす人もまた様々。ただ根っこにある主事として大切に思っている部分は尼崎でも飯田市内の各地区でも同じだと思う。

今一度、自分の立ち位置を振り返りながら今後の活動に活かしていきたい。

最後に、ランチをした際の話題も楽しかったです。お互いが思っていることを言える場は、会議室だけではないと感じました。野菜の話から介護の話まで有意義な情報交換ができました。お付き合いいただいた皆さんありがとうございました。

講義資料

講師 船木成記氏

[illegible]

『学習する地域づくり』と自治体職員の仕事とは

尼崎市顧問 船木成記（博報堂）

● はじめに～自己紹介として

- 1989年（株）博報堂入社
- ソーシャル・マーケティング（関係性の回復・つながりのデザイン）が専門
 - ◇ 社会課題の社会化と解決策の構築、課題解決のために必要なことの全部を「協働原則のもと」デザインする（と考えてます）。
 - ソーシャル分野の仕事として：子どもの居場所作り（文部科学省）、市民風車事業、チームマイナス6%（環境省）、ワークライフバランスのカエル！ジャパン（内閣府&厚生労働省）、メタボ対策の杉並ウエストサイズ物語（杉並区）等
 - ◇ 2007年9月より2年間、内閣府 男女共同参画局 政策企画調査官
 - 2008年1月より仕事と生活の調和推進室も併任（WLB推進担当）
- 2012年4月より尼崎市顧問（現在5年目になります）。
 - ◇ 2016年9月より信州総合ブランディングアドバイザー（長野県）
 - ◇ その他、高知大学客員教授、地球環境パートナーシッププラザ運営委員、大阪市男女共同参画センタークレオ大阪運営委員など

● 2013年2月、飯田市で「未来を拓く自治と協働のまちづくりを目指す研究集会」が行われる → 第二回を2015年尼崎市で開催、第三回は2017年度松本市で開催予定

- そのまとめの会で、船木が「尼崎は学習する地域を目指します」と発言

● その後、尼崎市役所内に、「学習する地域 勉強会」を設置

- 並行して、愛知県名古屋市で毎年夏に開催されているサマーセミナーを視察
 - ◇ 市長、副市長、教育長が2年間に、現地に足を運ぶ
 - 有志の市民とともに、バスを仕立てて視察に乗り込むということも
 - ◇ 主催事務局長アスクネット元代表の毛受氏を講師に呼び、勉強会を実施

● 2015年8月8、9日 みんなのサマーセミナー開催（準備期間2年間）

- コンセプトは、誰でも先生、誰でも生徒
 - ◇ 必要な持ち物は、スリッパと筆記用具と好奇心！
- 会場は、市内の女子校「百合学院」170超講座 大盛況でした！
- 2016年8月6、7日 第二回みんなのサマーセミナー開催
 - ◇ 会場は、百合学園と、旧聖トマス大学。320講座に拡大！！

● 2017年は8月5、6日の予定。尼崎市立双星高校が会場に。

- やはり、教育が、尼崎の一丁目一番地
 - 学力向上への長年の取り組み（全国平均並みに）
 - 後伸びする力を大切に
 - 「子どもの育ち支援条例」の策定（CSW と SSW）
 - 子ども子育て新システムの策定時に、野心的な取り組み
 - ◇ 「未就学前の子どもの教育保育についての基本的な考え方」の策定

- そんな折、聖トマス大学の、廃止に伴う、施設寄付（一部費用負担も）
 - 大学施設の再活用の先行ケース
 - 育ちと学びの拠点として、整備 ← 来年度予算の目玉に。
 - ◇ 子どもの育ち支援（福祉的、切れ目のない）
 - ◇ 教員の研修機能
 - ◇ 市民との接点（学生会館の活用、みんなの尼崎大学事務局）
 - ◇ 職員の研修機能
 - ◇ 教育に関する研究センターの設置
 - 先進研究者の招聘
 - オープンデータの積極的活用

- 市政100周年を終え、自治や学びを中心に、新しいまちづくりを。
 - 自治基本条例の策定（自治のまちづくり条例）
 - みんなの尼崎大学の開学
 - ◇ みんなのサマーセミナーを母体に、拡大へ
 - 「学習する地域」を本気で構築してゆくことに
 - ◇ キーワードは、自治と協働と学習（船木の個人的なものだけど）
 - 構造としては、自治を支える協働と学習

- 一方、シティプロモーションの視点からも、「学びと育ち」をキーワードに
 - ◇ 昭和45年より、人口減少に見舞われ10万人減（55→45万人へ）
 - ①あまらぶ：マチの自己肯定感の高めたい（等身大評価を）
 - ②「人生のスイッチが入るまち」尼崎を目指して
 - ◇ 今の自分があるのはあの時のあの経験（あの人との出会い）があるから。
 - その人が、尼崎の人だったり、その場面が尼崎であってほしい
 - 尼崎生まれでなくても、その瞬間に、きっとその人は「尼っ子」になる

- 尼崎市は、社会教育分野の再生、再構築も大きな課題
 - 残念ながら、尼崎市の公民館は貸し館的存在に。
 - ◇ 一方、尼崎市の場合、市長部局の現場で、いわゆる「公民館的な場」、協働の場が生まれていた。

- シチズンシップの育みも重要（市長公約にも）
 - 「自分たちのまちを、自分たちの手で作る」という市民力の涵養
 - ◇ もう一度、「私たちの学習」を取り戻したい

- 地方創生、総合戦略策定の中で、さらに「学習する地域」構想を進める。
 - 総合戦略政策パッケージ（6つの柱の中に書き込まれる）
 - ◇ ②学校教育・社会教育と人材育成（学習する地域構想）
 - ①子ども・子育ての支援の充実（子どもの育ち支援センター設置）
 - ⑤シビックプライドの醸成（学びと育ちを大切にするまち）

- 2016年10月 尼崎市自治のまちづくり条例（自治基本条例）の制定
 - 尼崎らしいまちづくりのルールを
 - ◇ シチズンシップの涵養
 - 加えて、地域振興体制の見直しも視野に入れてゆく
 - ◇ 公共施設の再配置、再統合等（利用ルールの統一も）
 - ◇ 市民協働と社会教育の融合
 - 地域学校協働本部の取り組みのスタート
 - 多機能小規模自治を都市部において実現を目指すための職員の力量形成を
 - ◇ 協働力の向上
 - ◇ 巻き込まれる力

- 「みんなの尼崎大学」のキックオフフォーラム（2016年11月26,27日）
 - コンセプトのお披露目（事業実施は、2017年4月～）
 - ◇ みんなのサマーセミナーは、その文化祭的な位置づけ
 - ◇ 飯田市のみなさんも、来ていただきました！
 - まちじゅうキャンパス構想
 - ◇ みんなが先生、みんなが生徒、どこでも教室

● その時の村山副市長のフォーラム開会宣言より

- みんなの尼崎大学は、形ある大学ではなく、まなびの改革だと思っています。
- どのような改革かと申しますと、3点あります。
- 一つ目は、経済第一主義から、創意や知恵、工夫を尊ぶ社会への改革です。
 - ☆ ものごとの解決をとにかく経済手段に頼る社会ですが、みんなの尼崎大学は、体験や活動、いろいろな人との交流から学び、そこから生まれてくる知恵や工夫により、解決を図っていくことを大事にする社会への改革です。
- 二つ目は、分かったつもりの社会から、スイッチの入る社会への改革です。
 - ☆ 情報が氾濫し、ものごとを語る評論家にはなれます。分かったつもりには容易になれますが、一步踏み込んで行動するチャレンジャーには、なりにくい社会です。みんなの尼崎大学は、学びから刺激を受け、それなら私にもできると背中を押してくれる、そして、活動の楽しさを知り、スイッチが入り、次の人へ連鎖するような社会への改革です。
- 三つ目は、暮らしの中にまなびを取り戻すことです。
 - ☆ みんなの尼崎大学は、社会教育といえば、社会教育の範疇です。生涯学習といえば生涯学習です。でも、そうした概念でとらえきれない、いろんな学びの形態が生まれています。みんなのサマーセミナーがそうです。どこでも教室、みんなが先生、みんなが生徒がモットー。尼崎でも昨年から取り組まれています。そう考えると、机の上だけでなく、まち中がまなびの場です。
- 学びの場から広がる様々な活動が暮らしの中の課題を解決していく。みんなの学びで解決していく。それがみんなの尼崎大学です。

● 下地作りとしての場の意味、繋がる場、学習する場の設計

- 尼崎ソーシャルドリンクスの定期的開催
 - ☆ みんなのサマーセミナー実行委員会につながる
 - ☆ 尼崎縁側化計画「あまり」始動
- ソーシャルビジネスプランコンペの開催によるつながりづくり
 - コトバのチカラの活躍
- あまがさきトゥー・ザ・フューチャー
 - ☆ まちづくりカードゲーム型ワークショップ
 - フューチャーしようぜ。

- COC 事業との連携
 - ✧ 兵庫県立大学と園田学園女子大学 （どちらも S 評価！）
- 長期実践型インターンシップの推進
 - ✧ あまがさきというまちに、インターンシップするという視点
 - 受け入れ企業の横連携 & 学生の同期感
 - 一緒に育ち、一緒に学び、一緒にまちを元気にする
 - コミュニティベースドラーニング（CBL）の深化
 - 園田学園女子大学と協働で CBL 研究会を立ち上げる
 - ✧ 今年度から、受け入れ企業を中心として、プラットフォームを設置。
 - すでに FB が始動
 - 今年度は 2 期目のスタート
- うふふなゼミ（船木ゼミ）の実施 & オープン化
 - ✧ 政策形成力、課題発見力、論述力、協働力の向上を目指したゼミ
 - ✧ 4 年目を迎えて、職員以外の参画を積極的に推進
 - 尼崎商工会議所、尼崎経済活性化機構、NPO、企業等
 - 将来的には、まちの課題を解決するシンクタンク機能の構築へ
- その一方、尼崎の歴史を鑑みるに、まさに学習の歴史と言える
 - かつては、九州や四国・中国と京・大坂を結ぶ、街道や海路の交差点
 - ✧ 義経が東北に落ち延びる時の出発点の港
 - ✧ 近松門左衛門が、尼崎でその戯曲を執筆（お墓の一つがある）
 - その後、時は流れて、阪神工業地帯の中核に
 - ✧ 公害問題や、都市問題に時代を先んじて直面し、試行錯誤をしながらも、その解決を目指し、奮闘してきた（現在は、環境モデル都市に）
 - ✧ 直近ではアスベスト問題や、福知山線事故なども経験している
 - つまり、尼崎の歴史は、羅針盤や処方箋のない課題や問題に向き合い、なんとか納得解や解決策をひねり出し、乗り越えてきた市民の歴史そのもの
 - そして、それは、「学び」以外の何物でもないのではないか。
 - ✧ その意味で、「学習する地域」を標榜し、学びをまちのコアアイデンティティに据えることは、必然的なアプローチ。

● 内発的シティプロモーション×ソーシャルビジネスの推進×学習する地域

=シチズンシップにあふれたマチ

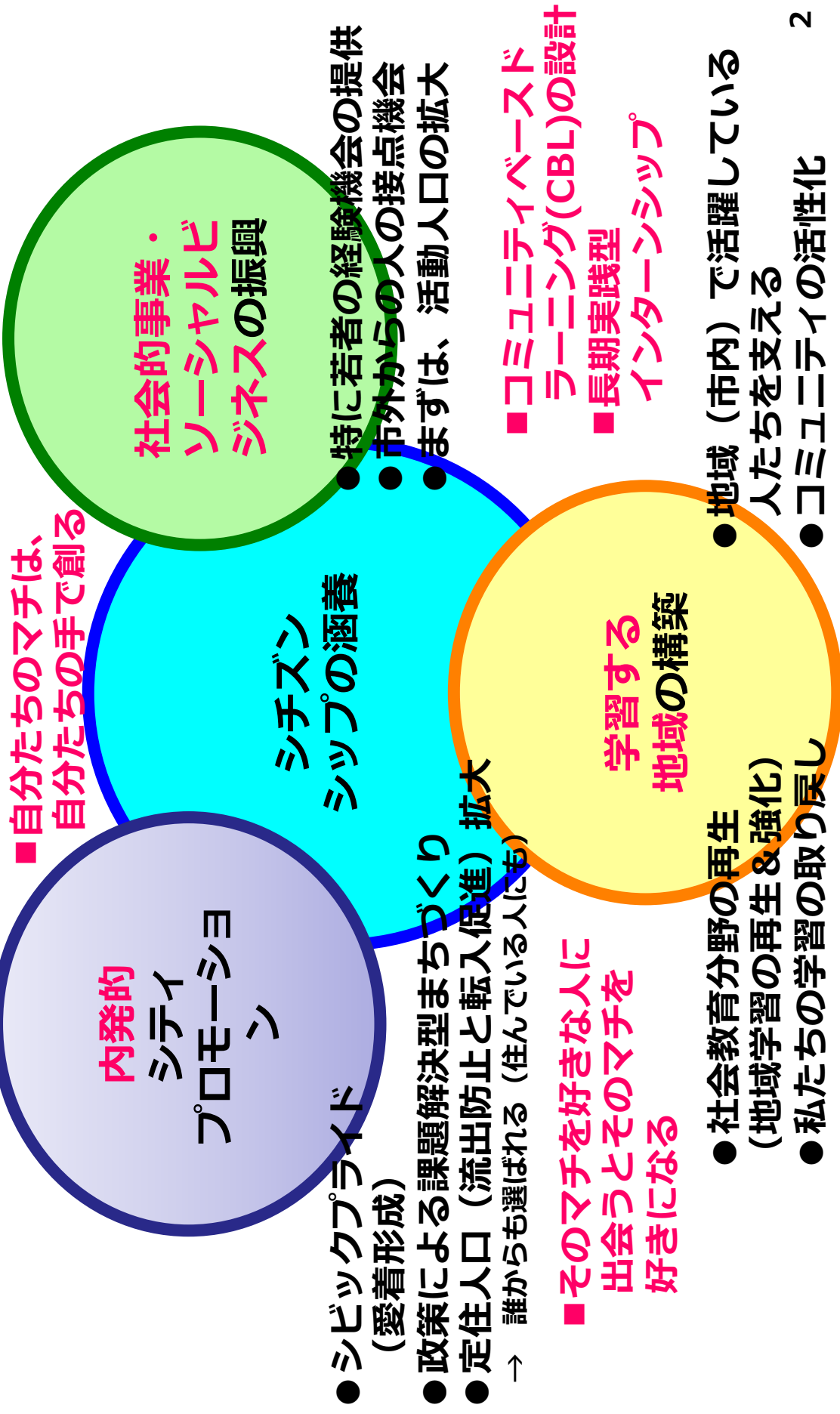
- 内発的シティプロモーション（あまらぶ：シビックプライド的アプローチ）
 - ◇ おまんじゅう理論（尼崎版シティプロモーション推進指針）
 - ◇ そのまちを好きな人に出会うとそのまちを好きになる（船木のまちづくり第一定理）
- ソーシャルビジネスや長期実践型インターンシップの推進
 - ◇ まちの課題を見つめ、行動する人が溢れるまちに
 - ◇ 若者等の経験機会の場になる（腕だめシティ？）←活動人口の拡大に
 - ◇ 行政側の力量形成（政策立案力、協働力等）
 - ◇ コミュニティ・ベースド・ラーニング（CBL）の実現（COC との関連）
 - 地域が若者や学生に慣れる
 - ◇ 若者が尼崎に出会う機会の創出&地域の持続可能性につながる
- 「学習する地域」の実現に向けて
 - ◇ 学習する人が溢れ、学習する組織が溢れ、学習する地域が立ち現れる
 - ◇ 社会教育分野の再生（かつての公民館的な場の構築）
 - もう一度、（私の学習から）私たちの学習の構築へ
 - 社会教育主事、公民館主事等の脱公民館的アプローチ
 - 本当の意味での社会教育の実現を目指す
 - ◇ パイロットプログラムとしての、みんなのサマーセミナーのスタート
 - 誰でも先生、誰でも生徒。持ち物はスリッパと筆記用具と好奇心！
 - ◇ 「みんなの尼崎大学」の開校を目指して（来年4月）
 - まち中「いつでも」「どこでも」キャンパス構想
 - まちの中に点在している、学びの場の再編集
- シチズンシップの育まれるまち
 - ◇ 自分たちのまちは、自分たちで創る
 - ◇ <経験から、学び、行動する> のサイクルが回り続けるまち
 - ◇ きっと、地域社会における「協働力の最大化」こそが、行政、公務員の仕事に。
 - ◇ 人件費が事業費という時代はすぐそこ？
 - 力のある住民に出会い、共に、手を差し伸べる必要のある人にリーチする仕組みや信頼関係を構築すること、そのものが仕事に。

- インプット→アウトプット→アウトカム→インパクト
 - スループットという新しい視点。
 - インプット → スループット → アウトプット
(協働プロセス)
- これからの時代に（持続可能な地域のために）必要なこと（特に公務員にとって）
 - チェンジエーজントの役割を誰かが担うこと
 - ✧ 1) 気づきと変革促進
 - ✧ 2) その（気づくと変革の）プロセス支援
 - ✧ 3) 地域資源の積極的連結や組み替え
 - ✧ 4) 問題解決策の提示とその実行
 - そのようなことを地域社会やコミュニティで生み出してゆくためのエンジンに、公務員がなれるのか。
 - そのようなことが生まれる場に、公民館的な場がなれるのか？
- 団体自治と住民自治の狭間を埋める作業、超える作業がこれからは必須に。
 - 権限移譲は、基本は団体自治の範囲内
 - 団体自治の限界（おおかえ）と住民自治の未成熟（おまかせ）
 - それこそが、協働であり、真の自治。
 - ✧ 団体自治のフロントにいる、基礎自治体の行政パースンの役割を再構築する必要がある。

本日は、ご清聴いただきまして、ありがとうございました。船木 拝

チャレンジを応援するマチ、尾崎のこれから 人生のスイッチが入るマチ、本気の大人に出会えるマチを目指して

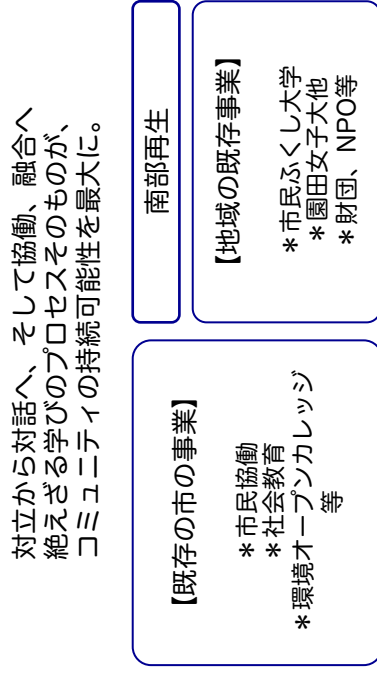
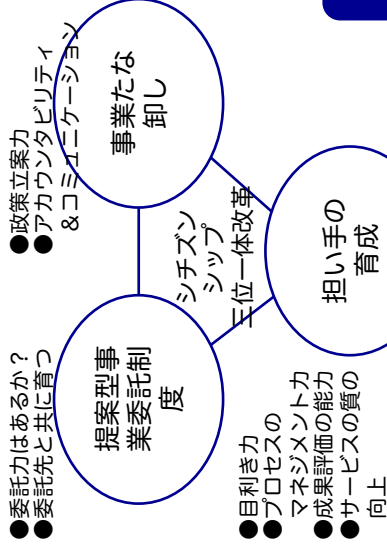
誰からも、常には選ばれる都市となるために



尼崎・学習する地域コンセプト

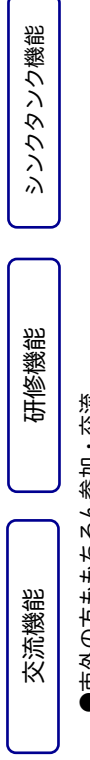
船木@20140129

*市役所サイドの意識変革
→ 手続きの役所から成果を出す役所へ



まち大学あまがさき (仮称)

新しい公共



●課題解決のための
チャレンジ

●誰にも居場所と
出番がある社会

●社会教育の存
在の在り方
●社会教育主事
としての公民館等
の在り方

●純粋な学力
レベルの低さ
●日常の学び
を継続するチカラ

●社会教育拠点
施設としての
公民館等の
在り方

●自転車
●たばこ
●酒
●ひったくり

●規範意識

●市外の方も
もちろん参加・交流

●排除の論理

●ソーシャル
インクルージョン

●給付型モデル
の課題

●就労支援

●介護

●障害

●生活習慣病

●子ども
の就労感・
モラル

●マナー・
治安

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

●尼崎の
シチズン
シップと
シップは？

●地域
教育課題

●子ども
の就労感・
モラル

●生活習慣
病

●家庭
教育

●学校教育
(小中高)

●生涯
学習

●男女
共同
参画

●トレピエ

●地区
会館

●総合
センター

●青少年
センター

●公民館
& 分館

●自治
会

●多様性、
寛容性

●市民
力の向上

●シチズン
シップの
普及・育
成

●市民自治
基本条例へ

第2回解体新書塾 参加者名簿（順不同：敬称略）

No	氏名	所属	性別	19日(日)					20日(月)		部屋割
				全体会	分科会	分科会NO	懇親会	宿泊	講義Ⅰ	講義Ⅱ	
1	平澤 健	飯田市	男	○	○	5	○	×	×	×	
2	佐藤 仁志	弥富町	男	○	○	3	○	○	○	○	旧館
3	中桐 史雄	倉敷市	男	○	○	3	○	○	○	○	旧館
4	佐藤 卓祥	大桑村社会福祉協議会	男	○	○	4	×	×	×	×	
5	杉村 信子	大桑村社会福祉協議会	女	○	○	4	×	×	×	×	
6	早川 孝	大桑村社会福祉協議会	男	○	○	4	×	×	×	×	
7	中田 陽一	大桑村社会福祉協議会	男	○	○	4	×	×	×	×	
8	前坂 美樹	尼崎市	女	○	○	6	○	○	○	○	旧館
9	桂山 智哉	尼崎市	男	○	○	5	○	○	○	○	旧館
10	山本 佳奈	尼崎市	女	○	○	5	○	○	○	○	旧館
11	宇高 竜哉	尼崎市	男	○	○	6	×	×	×	×	
12	長村 和美	尼崎市栄水科学	女	○	○	—	○	○	○	○	旧館
13	遠藤 彰	松本市あがたの森文化会館	男	×	×	—	×	×	○	○	
14	平林 祐介	松本市松原地区公民館	男	○	○	—	×	×	×	×	
15	内藤 哲夫	松本市白坂地区公民館	男	×	×	—	×	×	○	○	
16	胡桃 孝好	松本市島内公民館	男	×	×	—	×	×	○	○	
17	村山 正彦	松本市島立公民館	男	×	×	—	×	×	○	○	
18	田邊 健史	松本市新村公民館	男	×	×	—	×	×	○	○	
19	上嶋 秀俊	松本市中央公民館	男	×	×	—	×	×	○	○	
20	石神 直樹	長野県	男	○	○	6	×	×	×	×	
21	行野 修一	内灘町大学公民館	男	○	○		×	×	×	×	
22	公民館役員	内灘町大学公民館	男	○	○		×	×	×	×	
23	公民館役員	内灘町大学公民館	男	○	○		×	×	×	×	
24	公民館役員	内灘町大学公民館	女	○	○		×	×	×	×	
25	菅沼 美津子	飯田市橋南公民館	女	○	○	4	×	×	○	○	
26	熊谷 健太郎	飯田市東野公民館	男	○	○	1	×	×	○	○	
27	近藤 みのり	飯田市下久堅公民館	女	○	○	5	×	×	○	○	
28	三ツ井 洋樹	飯田市座光寺公民館	男	○	○	2	×	×	○	○	
29	小山 真由子	飯田市三穂公民館	男	○	○	2	×	×	○	○	
30	林 優一郎	飯田市南信濃公民館	男	○	○	1	×	×	○	○	
31	新井 康平	飯田市千代公民館	男	○	○	3	×	×	○	○	
32	熊谷 隆幸	飯田市竜丘公民館	男	○	○	5	×	×	○	○	
33	小池 勝士	飯田市川路公民館	男	○	○	1	×	×	○	○	
34	久保田 晋伍	飯田市山本公民館	男	○	○	4	×	×	○	○	
35	平沢 真一	飯田市鼎公民館	男	○	○	5	×	×	○	○	
36	小島 一人	飯田市公民館	男	○	—	—	○	×	○	○	
37	木下 慎一郎	飯田市公民館	男	○	—	—	○	×	○	○	
38	氏原 理恵子	飯田市公民館	女	○	—	—	○	×	○	○	
39	木下 巨一	飯田市公民館	男	○	—	—	○	×	○	○	
40	藤山 浩	講師	男	○	○	4	○	○	×	×	新館
41	船木 成記	講師	男	○	○	1	○	○	○	○	新館
	集約			36	31		13	8	28	28	

第5章 「飯田型公民館」と「学習する地域」

福森 敏也

5.1 はじめに

5.1.1 報告書の作成に至るまで

私がこの報告書で原稿を執筆するのは、今年度で3回目となる。一昨年度は、拙稿「飯田で飲食店を営む人々の暮らし」にて、飯田の中心市街地で居酒屋やレストランを経営する方々の「ここ」に迫った。昨年度はテーマをがらりと変え、「下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方」と題して、発表から50年を経た「公民館主事の性格と役割（下伊那テーゼ）」に注目しつつ今どのような公民館活動のあり方が目指されているのかを調査した。

これまでの興味関心、とりわけ昨年度の調査内容を踏まえて、私は今年度も「飯田型公民館」の特徴と広がりについて更に深く調べてみたいと思うに至った。中でも私が興味を持ったのが、飯田市が「飯田型公民館」のノウハウを他地域にも知らせるべく企画している「解体新書塾」である。というのは、昨今の地方創生ブームの中で、活発な活動を行っている自治体に学びに行くことは各地で行なわれているだろうが、飯田市はその特徴的な公民館活動を自ら率先して「輸出」を試みようとしているように見え、そこにどういった真意があるのか気になったためだ。

ところが、実際に飯田市でお話を伺い、さらには「解体新書塾」に参加した兵庫県尼崎市の職員の方々にもお話を伺いに行くと、単なる「輸出」と「輸入」の関係ではない、より相互発展的な関係が見えてきた。両市の置かれた全く異なる状況の中で、それぞれの実情に応じてどのような地域のあり方が目指されているのか、私の伺った内容を報告したい。

5.1.2 調査概要

2016年12月15日に、「飯田型公民館」と他地域の関わりについて、飯田市公民館副館長・木下巨一氏にお話を伺った。その後、2017年1月6日に、木下氏のご紹介により「未来を拓く自治と協働のまちづくり研究集会」および「解体新書塾」を通じて飯田市と関わりのある兵庫県尼崎市へ訪問した。尼崎市では、尼崎市男女共同参画課の奥平裕久氏と顧問の船木成記氏より、「みんなのサマーセミナー」と「みんなの尼崎大学」の取り組みについてお話を伺い、そのまま「みんなのサマーセミナー」実行委員会の会議にも参加させていただいた。本章では、両市で伺った内容をもとに、互いの地域活動のあり方と関連・相互発展について、関連する文献の内容も交えつつ述べてゆく。

5.2 飯田市と尼崎市の関係の発端

5.2.1 飯田型公民館の特徴と「ガラパゴス化」

長野県飯田市は、昨年度までの報告書でも幾度となくふれられているように、公民館活動が非

常に盛んな地域である。その特徴を改めて述べるに当たって、まずは戦後の公民館史の流れを大雑把にさらっておきたい。

第2次世界大戦の終了後、GHQによる占領下の日本は、戦前の軍国主義・全体主義的価値観に対する反省から、民主主義を基盤とした政治への転換を目指していた。このとき、「民主主義の学校」として、庶民のレベルにまで民主主義的な思想を広める拠点とするべく、社会教育課長・寺中作雄らによって構想されたのが公民館であった。寺中によると、公民館は“多方面の機能を持った文化施設”であり、すなわち“社会教育の機関であり、社交娯楽機関であり、自治振興機関であり、産業振興機関であり、青年養成機関であり、その他町村において必要と思えば尚いろいろの機能を持たしめて運営することができるが、要するにそれらの機能の総合された町村振興の中心機関である”⁷²。それから各地で公民館建設の機運が高まり、あらゆる場所で地域課題の解決に向けての活発な議論が行われるようになった⁷³。

しかし、1970年代以降、新自由主義的な政策のもとで公民館の再編や指定管理化が進み、「社会教育の終焉」と呼ばれるような事態が訪れた。高度経済成長を背景に社会の構造は大きく変化し、特に都市部では人々の地縁的な関係が希薄になっていった。そんな中多くの自治体において、行財政の効率化を狙い、それまで独立であった公民館を首長部局の下へ再編したり、公民館の統廃合を進めて対象地域を広域化したり、指定管理者に運営を委託したりといったことが行われた。その結果、地域の実情に沿っていない講座形式の学習活動が増えるなどして、公民館での活動が地域の課題解決になかなか結び付かないことが多くなってしまった。

ところが、全国の多くの公民館がこのような歴史をたどった一方で、飯田下伊那地域には今なお「社会教育の終焉」を微塵も感じさせない活発な「公民館」活動が根付いている。飯田市では、中央の飯田市民館を連絡調整役のハブ公民館としながら、市全体に20の地区公民館と105の分館が存在している。その20の地区公民館すべてに市の若手職員が主事として配置され、公民館主事の仕事を通じて住民活動の最前線に立つ中で、自治体職員としての力量形成がなされる仕組みとなっている。住民にとっては、「公民館」は自分たちの暮らしに密接に結びついた議論の場であり、生活上のあらゆる課題を乗り越える糸口となる場である。この「公民館」活動を貫いているのが「4つの原則」、すなわち、①地域中心の原則、②並列配置の原則、③住民参画の原則、④機関自立の原則、である。牧野篤(2012)は、これらの4原則が“直前の原則を保障する関係の体系をとっている”としており、飯田の公民館制度の特徴を“極めて高度かつ強固な地域性と自立性”と表現している⁷⁴。

このような特徴をもつ飯田市の「公民館」は、全国の他の公民館と区別して「飯田型公民館」

⁷² 寺中作雄『公民館の建設』公民館協会、1946、pp.7-12.

⁷³ とりわけ飯田下伊那地域の公民館の勃興については、拙稿「下伊那テーゼに学ぶ公民館のあり方」(2015年度飯田市社会教育調査実習報告『“飯田”というつながり』第1部第1章)も参照されたい。

⁷⁴ 牧野篤『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと—』、大学教育出版、2012、p.153.

と呼ばれる。「飯田型公民館」は、牧野光朗飯田市長の言葉を借りれば、講座中心・貸館型の他の公民館とは異なる独自の進化を遂げたという意味で、“ガラパゴス化”している。このように、他の公民館が半ば衰退しているような実状にあり、飯田だけが孤立無援の状態で「公民館」活動を行っているという現状は、飯田にとっても悪影響を与えかねないものである。そこで、市長から木下氏へ「飯田型公民館を全国に広めてほしい」との要望があったという。このときちょうど、フィリピンのレガスピ市に飯田型公民館のノウハウを広める事業も行っていたことから、国内他地域へも同じように広めていこうという機運が高まった。ここで、飯田と足並みをそろえ始めたのが兵庫県尼崎市である。

5.2.2 尼崎市の「学習する地域」構想

兵庫県尼崎市は、大阪と神戸という 2 つの大都市の間に位置し、阪神工業地帯の中核として、最盛期の 1970 年前半には約 55 万人の総人口を誇った都市である。高度経済成長期の人口の大幅な社会増の中で、飯田などに比べるとくだんの通り地縁の関係が希薄となり、尼崎市内の公民館も、全国の多くの自治体と同様に講座中心・貸館型の運営がなされるようになった。現在、人口は約 45 万人であり、市内の公民館は 6 つのみである。

尼崎市は、これまで多くの課題や困難にぶつかってきた都市でもある。まずひとつは、高度経済成長期の公害問題である。国内有数の工業地帯として工場が立ち並び、そこから出る排煙や排水が、人々に甚大な健康被害をもたらした。また、それとほぼ同時期に、ベトナム戦争を背景としてベトナムからの移民難民が数多く流入してきたということもあった。日本語が通じず、日本の文化も知らない海外の人々を社会的に排除してしまうと、犯罪や貧困問題につながってしまうことが懸念された。そして、1995 年には、阪神淡路大震災という未曾有の大災害が尼崎を襲った。これらの課題や困難に立ち向かうためには、人々の「学び」が不可欠であった。

こういった地域特性をもつ尼崎市の職員に、船木氏は 2012 年より「顧問」という立場で就任した。船木氏は(株)博報堂より尼崎市に出向し、ソーシャルマーケティングの専門知識を活かしつつ、現在まで 5 年にわたり尼崎市のブランディングを行ってきた方である。その船木氏が就任当時から思い描いていたのが「学習する地域」という構想であった。確かに尼崎市の公民館は「社会教育終焉論」の延長上にあるような実態かもしれないが、船木氏が考えるには、人々の「学び」の力そのものが衰えたわけではなく、暮らしのあちこちに「学び」は根付いているのだという。それは、上に述べたような数多くの困難を、住民たちの「学び」によって解決してきた市の歴史を見ても明らかである。公害問題に対しては、子どもの体調不良に対する親の気づきが「学び」につながり、企業や市に対して訴訟を起こすに至った。移民難民に対しては、市民が中心となって「日本語読み書き教室」を開催し、社会的包摂を目指した。尼崎にはこのような、「飯田型公民館」ほど顕在的ではないかもしれないが、しかし着実な「学び」の営みがある。これを基軸に据えた地域づくりを行えないかというのが、船木氏の「学習する地域」構想である。行政分野で重要なキーワードである「自治と協働」という言葉についても、それを動かすエンジンは「学習」なの

だと船木氏は言う。この構想は、当然「飯田型公民館」の考え方と調和的なものであった。

5.2.3 飯田・尼崎両市の連携へ

木下氏と船木氏の初めての出会いは、2013年2月に飯田市で開催された「未来を抱く自治と協働のまちづくり研究集会」であった。この企画者として木下氏と船木氏が一緒になり、その集会の中で船木氏が「学習する地域」構想を宣言したのが、飯田市と尼崎市が足並みをそろえてゆくきっかけになったのだという。船木氏の「学習する地域」構想を具体化していく上で「飯田型公民館」の考え方はひとつのヒントになると思われたため、飯田市と尼崎市とで置かれた状況は大きく異なるものの、学びあえる部分を互いに学びあうような関係を目指して、両市の連携はスタートした。その後「未来を抱く自治と協働のまちづくり研究集会」の第2回が2015年12月に尼崎市で、第3回が2017年1月に長野県松本市で行われたが、いずれも両市が参加し、相互に学びあいを進めている。

5.3 飯田市による「解体新書塾」の取り組み

5.3.1 「解体新書塾」の概要と経緯

飯田市は、「ガラパゴス化」からの脱却を図るため、「飯田型公民館」の考え方を国内他地域に広める取り組みとして、2014年より「解体新書塾～公民館・地域自治のあり方をとらえ直す自治体間研究～」を実施している。これまで、第1回が2014年10月18～20日に、第2回が2016年2月21・22日に、いずれも飯田市内で開催された。本項では、解体新書塾の概要と開催に至るまでの経緯について記述する。

2014年に実施された第1回には、兵庫県尼崎市・長野県松本市・駒ヶ根市の自治体職員と、大学教授ら研究者、飯田市民など、総勢68名が参加した。第1回のテーマは「住民自治を支える自治体職員の力量はどのように育つのか」というものであり、有識者による講義や、飯田市の現役公民館職員への公開インタビューなどが行われた。

2016年に実施された第2回には、第1回に参加した3市に加え、長野県上田市・石川県内灘町・島根県邑南町の3市町からも参加があり、研究者や市民らも含めて計42名が参加した。第2回は、「住民自治力」を高めるために、そこに暮らす住民自身が学ぶこと、そして個人としての学びから集団としての「学び」と活動に広がっていくことを、「学びあう地域づくり」と捉えた上で、それを支える自治体の在り方を考えることがねらいとされた。そのねらいのもとで、研究会では、木下氏と船木氏の対談や、九州大学八木教授による講義、飯田市・牧野市長による講義などが行われた。

この「解体新書塾」が開催されるに至った経緯は、まず、2節1項に記したような課題意識からである。「飯田型公民館のガラパゴス化」という事態に関して、域内で優れた実践が展開されているということ自体は当然悪いことではないが、一歩飯田という地を離れると、公民館という存在が蔑ろにされて住民どうしの「学び」が十分に行われていない現状があるとするならば、それ

は「われわれ飯田さえ上手くいってればそれでよい」と言っていられるような話ではない。木下氏によると、市長より命を受け、他の地域を巻き込んだ取り組みが何かできないか画策していたところ、飯田市公民館の元職員であり木下氏の先輩にあたる長谷部三弘氏より「それは『解体新書塾』だ」というお言葉があったのだという。「解体新書」はかの有名な杉田玄白・前野良沢による人体解剖の翻訳書であるが、それを飯田型公民館に当てはめて「解体」してみようという意味を込めて、この名前に決定したそうだ。

こうして開催に至った第1回の解体新書塾に、尼崎市からは船木氏ら職員十数名が参加した。木下氏と船木氏は、それ以前に開催された「未来を抱く自治と協働のまちづくり研究集会」にて卓をともにしており、船木氏が当時すでに抱いていた「学習する地域」構想を具体化するにあたって、飯田型公民館をひとつのインスピレーションとすべく、解体新書塾へ参加するに至ったという。単なる研修ではなく、互いの間に自己満足でおわらないような関係をしっかりとつくり、自治体のトップまで巻き込みながら、変えられるところをとことん変えていこうというのが解体新書塾のスタンスであり、この取り組みは次項で記すような大きな効果をもたらすものとなった。

5.3.2 「解体新書塾」がもたらした効果

この「解体新書塾」の成果と課題には様々なものがあるが、飯田市ホームページに掲載された第1回の記録には、以下の3点にまとめられている⁷⁵。

(1) 飯田型の公民館制度や現場主義の仕事を通して飯田市の職員が獲得した「住民自治を支える職員の力量とその獲得のプロセス」についての共通点が明らかとなり、このことを参加した自治体職員や研究者が共有することができた。

(2) 主体である住民が力量をつける営みを支えることが自治体職員の役割であり、そう考えると自治体の職員には飯田型の公民館の経験の中で獲得してきた「住民に巻き込まれる力」が根底にあることを確認することができた。

(3) 一方で、地方自治の本旨である住民自治、住民との協働の意義などの理解の及んでいない職員層も少なからず存在することも見えてきており、その意味では飯田の職員の一層の意識改革の機会が必要であることが課題である。

今回木下氏に伺った話の中でも、これらに近い内容の成果が語られていた。木下氏によると、「解体新書塾」に参加した尼崎市の職員の感想からは、次のような成果を読み取ることができるという。1つは、「主役は市民なのだ」という意識が尼崎でも芽生えたことであり、もう1つは、その「主役」としての市民とともに、自治体職員も汗をかくことが必要だと多くの職員が感じていたことである。これらの2点から、飯田型公民館の根幹をなしていると言える基本的な考え方

⁷⁵ 飯田市ホームページ「解体新書塾の全記録」入手先 URL : https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/life/29494_57459_misc.pdf (アクセス日 : 2017-1-29)

が、尼崎市の職員にも共有されたものと見える。実際に、たとえば尼崎市の大庄公民館では、「大庄公民館ことはじめの会」と題して、公民館が用意した講座を市民が受講するという従来の形ではなく、「何をやりたいか」という根本のところから市民と一緒に話し合っ決めていく取り組みが始まったそうだ。加えて、3 つめの成果として、尼崎の「地域」の概念が変わったということがあるという。尼崎市内の6つの公民館を人口あたりに換算すると、7〜8万人に一館ということになるが、それではあまりに広すぎて「地域」の隅々にまで「学び」を行き届かせることができない。尼崎市には飯田市のように細かい自治会や集落の単位がないが、これからはより細かい単位で「地域」を見ていく必要があるという意識改革が始まったようだ。

奥平氏に伺った話からも、尼崎市の公民館のあり方の変化の一端を垣間見ることができた。従来の貸館型運営の「私の学び」が、「みんなの「学び」」へと変わってきたという。奥平氏は以下のように述べていた。

“公民館で自分たちの学びだけで終わってた人たち、公民館利用者、尼崎では「都市型」の話はいろいろ聞いてるかもしれないですけど、やっぱりこう言ってみたら「生きがいくくり」みたいな、趣味の集まりを貸館としてやって、そこで例えば大正琴を弾いたり踊りをしたりとかっていうことで、「自分たち楽しいなあ」「よかったなあ」で終わってしまっていたことを、公民館が「いや、それをじゃあ地域の人たちに教えてあげてくださいよ」ということで、自分がやってきたことをオープンにする場、誰かに伝える場みたいなことを、去年から持ち始めて、その人たちは今までずっと「私の学び」で終わってたところなので、「そんなんうまくいくか、恥ずかしいわ」みたいな感じやったんやけど、いざやってみると、そこに「誰かに伝える」ということの楽しさとか、子どもが一人だけ来てくれたこともすごく嬉しくて何かやっていくみたいな、そういうところに動き方を変えていったりとか。”

この話の中の“「誰かに伝える」ということの楽しさ」という言葉は、尼崎でも市民主体かつ共同的な「学び」が展開されはじめたことを、象徴的に示しているように思う。「都市型」と言われる講座中心の公民館が、飯田型公民館のような、住民が誰に言われたわけでもなく勝手に動いていくような場へいきなり転換することはできないだろうが、そこにうまく具合にテコ入れしていく様子が描かれている。

逆に、解体新書塾を主催したことによって、飯田市自身にとってはどんな効果があったのかについても伺った。木下氏は以下のように述べていた。

“この事業の中で尼崎の職員の人たちは本当にこう加速的っていうかな、爆発的につながりを増やしてるんだよね。その中でやっぱり見る目が変わっている姿があって、飯田の公民館はそういう仕組みの土台の上におのずから主事は学べるんだけど、ここの人たちは自分たちでそういうのを作っていくっていう、要は作り上げていく姿に、職員の姿勢に飯田の主事たちはすごく学んで

るっていうか。何もないところから作っていくっていうことの、この人たちのやる気みたいなのはすごいなって。(中略)ある意味日本の公民館ってもともと、戦争で荒廃した日本の国を地域からなんとか復興していこうっていう、それをそこに住む人たちが自分でやっっていこうっていう呼びかけで始まったもので、尼崎が今ちょうどそういう姿っていうか、課題を抱えた街が、そこに暮らす人たちが自分たちで当事者・主体になって、そういう問題を解決できるまちづくりを始めようっていう、要は戦後の草創期の公民館ってこういうエネルギーだったんだなあっていう、そういう原点を見るような場所?...っていうのが、尼崎のいろんな試みにも飯田の主事を何人も連れて行っとなるんだけど、やっぱりそういう振り返りになってるね、主事たちが。”

様々な困難を乗り越える「学び」が尼崎市に潜在していたことを考えると、全く何もなかったわけではないだろうが、少なくとも飯田のように自治体職員と住民の関係を支える強固な基盤があるわけではない尼崎において、眠っていた何かが動き出すパワーには底知れぬものがあるようである。その姿に飯田の主事たちが学ぶという、相互に高め合う関係がこの話から読み取れる。

次節では、このように大きな変革の力をもつ尼崎市が、飯田との関係もありながら近年始めた取り組みについて述べてゆきたい。

5.4 尼崎市「みんなのサマーセミナー」と「みんなの尼崎大学」

5.4.1 「みんなのサマーセミナー」の概要と経緯

尼崎市では、2年前の2015年8月より「みんなのサマーセミナー」(以下、「サマセミ」)を実施している。サマセミは、市民自らが講師となり、自らの得意分野を生かして授業を行い、他の市民が生徒として話を聞くという、参画型の学習イベントであり、「学習する地域」の実現への試金石として展開されているものである。財政的な困難もある中で、公民館のような学習の拠点を新たに建設せずとも「学び」の場を創出している、優れた取り組みであると言える。本項では、サマセミの概要と開催に至るまでの経緯について記述する。

サマセミは、2015年8月8日・9日に第一回が開催され、翌2016年8月6日・7日に第二回が開催された。尼崎市内の百合学院中学高等学校・旧聖トマス大学を舞台として、みんなのサマーセミナー実行委員会と尼崎市の共催という形で開催されている。市役所の担当課は社会教育課と協働・男女参画課であり、両課の「提案型協働事業」という位置付けになっている⁷⁶。実行委員会は、市内の学校職員やコープこうべなど、さまざまな団体に属する有志個人が集まって結成されたものであり、市と役割分担をしながらサマセミの運営に当たっている。例えば、当日の時間割の作成は実行委員会が行うが、一方個人で請け負うのが難しい問い合わせ対応などは市が行い、講師の呼びかけは実行委員会と市とで協力して行う、などといった役割分担がなされている。運営資金は、有志による寄付金やクラウドファンディング、企業協賛、市の補助金などにより賄われており、また多くのボランティアスタッフが運営に携わっている。講師となるのは中高生から

⁷⁶ 「提案型協働事業」には補助金が交付され、サマセミの資金源のひとつとなっている。

尼崎市のサマセミのモデルとなったのは、愛知県で 28 年にわたり開催されている「愛知サマーセミナー」(以下、「愛知サマセミ」)であった。船木氏の知り合いの方が愛知サマセミのリーダーを務めていたというのが発端で、その方に尼崎でレクチャーを開いてもらったり、尼崎市民が愛知サマセミを見に行ったりして準備を進め、尼崎のサマセミの結実に至ったのだという。初めて愛知サマセミを訪問したのが 2013 年のことだったというが、このときには「せっかく来てくださるのなら、ぜひ尼崎の市長に講座をもってほしい」という愛知の主催者側からの要望があり、稲村和美市長が、母親市長、かつ女性市長としての話を教壇で行ったそう。この愛知サマセミには、尼崎市の学童保育関係の職員が 28 年前の発足時から関わっており、奥平氏はその職員の方とも「尼崎でもやりたいね」という話をしたという。はじめは私立高校の 3 人の先生が集まって、「学習指導要領に拠らない、本当に自分たちの教えたことを教えた」ということで、わずか 8 講座からこの愛知サマセミは始まったそうだが、30 年近くの時を経て講座数は 3 日間で約 2,000 講座にまで膨れ上がった。奥平氏はこれを“生き物のようなイベント”と表現していたが、それはもうなんとも刺激的な 3 日間であったようだ。1 年後には、船木氏が運営している社会的事業のプラットフォーム「ソーシャルドリンクス」のメンバーも、15 人ほど愛知サマセミの視察に伺い、ついに 2015 年に尼崎市でも「みんなのサマーセミナー」の開催に至った。

最初は、「財政的にあまり余裕のない尼崎市でこんなイベントが開けるだろうか」という懸念もあったというが、これまで 2 回の開催で軌道に乗りつつある。次項では、この取り組みがもたらした大きな効果について記述する。

5.4.2 「みんなのサマーセミナー」がもたらした効果

前項のような経緯でスタートした尼崎のサマセミは、開催 2 年目にしてすでに多くの効果をもたらしている。具体的には、市民が尼崎という暮らしの拠点において、新たな出会いや発見を行う場として機能していると言える。奥平氏は、サマセミという場について次のように語る。

“街の人が自分の経験とかを元に話をして、それを街の人が聞くっていう、どっかから偉い人を呼んできて話を聞いてっていうことじゃなくて、身近な人のそれまでの潜在していた経験や知識なんかを知ること、で、「尼崎ってすごいんだ」とか「面白い人がいるんだ」とか、そんなこととか、その活動に興味を持って普段の活動に参加していく、そんな場にしていこうってことで「みんなのサマーセミナー」やってるんやけど...”

奥平氏は、サマセミをこのような出会いと発見の場にしたいと考えているが、以下の参加者の感想からは、まさにその想いに違わない、魅力的な「学び」の場となっていることが見てとれる。

“講師の方と新たな縁を得ることがあり、このイベントの醍醐味を感じました。来年と言わず、定期的にいろんな場所でこの様な場が増えたらいいなと思います。”

“オープンでフラットな雰囲気での開催。とても良かったです。尼崎の魅力はやはり「人」だと再認識しました。”

実際、サマセミでの出会いが、サマセミ以外の場への学習活動へ派生的に展開していった事例もすでにいくつか存在する。例えば、サマセミに参加したひとりの若者が、再開発ビルの元々カフェであった空間をリノベーションして、「私設寺子屋」のようなものを作った例があるという。彼の呼びかけで約250人もの人がリノベーションに関わり、完成した「学び」の空間では、様々な市民が講師として講座を開いている。ワンドリンクを場所代とし、講師はみな手弁当という形で、ここ2年の間に100講座ほどが開講されたそうだ。さらに、もうひとつの例として、尼崎市がソーシャルビジネスコンペを開催した際に「子どもたちに書くことの楽しさを伝えたい」というビジネスプランでエントリーしてきたライター的女性が、サマセミをきっかけに市内でボイストレーナーをやっている人と出会い、「書いたことを口に出して表現する」という、プラスアルファが加わった新たな講座に生まれ変わった、ということもあったという。サマセミにおける出会いと発見は、こういった二次的な学習活動を生み出す可能性を秘めている。

また、サマセミは他者との出会いや発見の場であるばかりでなく、自分自身に対する発見の場にもなりうるような仕組みとなっている。奥平氏は、次のようにも語っている。

“実際これやってみると、2日間で初年度は170の授業があったんで、1日50分の5時間授業で10教室、それからいろんな講座がダラッと集中してるから、ひとつ例えば司法書士による相続遺言制みたいな聞きに行こうと思った人が、せっかく来たから次の時間、これ土曜日の3時間目なんで、次の時間4時間目もせっかくやから面白そうなの聞いてこうみたいなことで、**自分が興味のあることプラスアルファのことに出会える場**に実際なった。それから、愛知もこれは言ってたんやけども、「**planned happen (計画された偶然性)**」という言い方をするらしいんやけども、偶然に出会う、面白い人に出会ったりとか、ほんまに普段やったら行かない話を、聞かない話を聞く場を持つことで、その人の視野が広がって、ほんとはそこを聞いたら「あ、面白そうや」「自分はそんなことに興味があったんや」っていう気づきがあったりとか、それとか「社会ってこうなってるやん」っていう気づきがあったりとか、そういう場面になってるんじゃないかなあと。実際アンケートもそんな意見があったりとか。”

通常の公民館事業などであれば、何か一つのテーマについて講座が開かれ、それに興味のある参加者が集まって、話が終わったらそれで帰ってしまう、ということが多い。しかしサマセミでは、奥平氏も述べている通り、目移りするようなあらゆる講座が次から次に用意されていることで、あることに興味を持ってやってきた市民が別のことにも興味を持つ、といったことが往々にして起こっているのである。参加者からは「受けたい授業が重なってしまった」という主旨の感想も

数多く寄せられており、たくさんの魅力的なテーマを前にして、いわば「学び」への関心がインフレーション状態にある様子が伺える。

このような出会いや発見は、来年度以降の「みんなのサマーセミナー」や、次項で詳しく取り上げる「みんなの尼崎大学」で、さらなる広がりを見せていくように思われる。

5.4.3 「みんなの尼崎大学」構想へ

尼崎市では「学習する地域」の実現に向けて、「みんなのサマーセミナー」の発展形態にあたる「みんなの尼崎大学」というものが現在構想されている。サマセミはそれ自体すでに優れた取り組みであるが、年に1度、2日間だけのイベントとして「学び」を行うばかりでは、残念ながら「学習する地域」が具現化しているとは言い難い。そこで、この「学び」をより恒常的なものとしていくための構想が「みんなの尼崎大学」である。すでに何回か「みんなの尼崎大学オープンキャンパス」として市内各地でイベントが開催されており、市民にとって「学び」がますます身近なものとなりつつある。また、2016年11月26日・27日には、この構想のキックオフフォーラムとして「みんなの尼崎大学はじまるの会！」も開催された。

	開催日	テーマ	場所
第1回	2016年6月28日	ゴミ袋より「知恵袋」 ～面白がって環境活動に取り組む方法を考えてみよう～	あまがさき環境 オープンカレッジ
第2回	2016年7月21日	私たちの「大学」をつくる ～学生会館の素敵な使い方を考えてみよう～	聖トマス大学
第3回	2016年8月18日	つなげる地元ビジネス ～地域の新しいビジネスを考えてみよう～	尼崎創業支援 オフィスアビーズ
第4回	2016年9月7日	アマの公民館の「実は」を開く ～来るべき公民館の未来を描いてみよう～	小田公民館
第5回	2016年11月9日	まちとつながる DIY	尼崎傾奇者集落
フォーラム	2016年11月26・27 日	みんなの尼崎大学はじまるの会！	園田学園女子大学
第6回	2016年12月4日	子育てをみんなで面白がるヒント	あまびっと
第7回	2017年1月20日	未来をつくる「キョウドウ」を学ぶ	コープこうべ 塚口店 2F
第8回	2017年2月17日	千年前から地域の学び場	富松神社

図表 I-5-2 「みんなの尼崎大学」開催テーマ (Facebook ページより筆者作成⁷⁸⁾)

⁷⁸ 「みんなの尼崎大学」 Facebook ページ 入手先 URL : <https://www.facebook.com/ucmamagasaki/> (アクセス日 : 2017-1-31)

これまでの開催テーマを見てみると、ゴミ問題や子育ての悩みなど、日々の暮らしに直結するような毎回異なるテーマについて、毎回異なる場所で学ばれていることがわかる。大学や公民館はもちろん、小売店や神社なども開催場所になっているのが特徴的であり、どんな場所でも「学び」の場となりうることを象徴していて、地域に根付いた学習活動が展開されていくことが期待される。

こういった「学び」の場は、「みんなの尼崎大学」が実現するまで存在していなかったわけではない。むしろ、そういった場は多分に存在していたといえる。例えば、以前から市が主催していた講座は約 500 あり、さらに指定管理者が委託を受けてやっている講座や、コープこうべなど民間の企業・団体が独自でやっている講座まで加えると、年間 1,000 を超える講座が尼崎市内で展開されていた。これらの学習活動の拠点も、公民館や地区会館、地域振興センター、大学など、多種多様であった。しかし、これだけたくさんの学習機会がありながら、異なる拠点で展開される活動間に連携はほとんどなく、また、来る人が固定化している、内容がマンネリ化している、予算や人手が不足しているといった課題を抱えている活動も数多く存在した。そこで、市の首長部局が中心となって、これらの多様な学習活動の連携・相互調整を図り、互いの顔が見えるような学習活動のプラットフォームを構築しようとして始めた試みが「みんなの尼崎大学」である。いわば、これまでバラバラに存在していた「学び」の場の再コーディネートである。

「みんなの尼崎大学」はまだ模索段階ではあるが、地域の学習活動が新たな出会いを生み、その出会いがさらなる学習活動を生むような市民主体の好循環が、すでに尼崎市で始まりつつある。

5.5 おわりに—飯田・尼崎両市の「学びあう」未来へ向けて—

これまでみてきたように、飯田市における公民館活動は、地域住民自身が自らの暮らしをよりよいものにしてゆく原動力となっている点で、極めて優れた活動である。この活動が「解体新書塾」によってどう広まっていこうとしているのかを捉えることが、筆者の当初の関心事としてあった。しかし、当然のことながら、飯田と他地域では置かれた状況が全く異なるため、飯田で行われている活動をそっくりそのまま「輸出」して、同じことを他地域でもやれば同じようにうまくいくわけでは決していない。このことは、「解体新書塾」などを通じて現在絆が深まりつつある尼崎市との関係においても、もちろん例外ではない。

飯田市の地域的特徴として、多くの人の暮らしが市域内で完結しているということが挙げられる。すなわち、暮らしの土台である家庭、そして自治会や集落といった基礎単位が、学校や職場といった昼間の活動の場と大きく分離することなく、混ざりあうようにして日々の生活を形づくっている。飯田の場合はそこに、強固な社会教育の伝統が根付いていて、「善き市民住民」が自治体職員と共同でものごとにあたることで、地域の「善き明日」が築かれるということへの直感的理解がある。

一方尼崎では、大阪と神戸という二大都市との間で多くの人々が行き来し、人々の暮らしが市域の枠を超えて展開している場合が多い。さらに、45 万人の人口のうち毎年約 2 万人が転出・転

入で入れ替わっているということもあって、人々の関係性はいくぶん流動的である。そのような中で、課題に事欠かない街という地域特性があって、その課題を媒介とした人々の流動的なつながりが、これまではいくぶん潜在的に、これからより顕在的に「学び」を生み出して、「善き明日」を築いている。

両市の特徴を相対化すると、飯田市は「コミュニティ」ベースの街、尼崎市は「アソシエーション」ベースの街であると言える。前者は地縁関係に裏打ちされている分、地域特有の課題に密着しやすいという特性があるが、一方で、NPOの活動に代表されるような、地縁の枠組みを超えて同じ課題を持つ人どうしが結びつく営みが比較的弱い可能性がある。後者は逆に、地縁の枠組みに囚われず多くの人と共通の課題を共有することができるが、例えば防災や防犯など、よりローカルな関係がものを言う課題への対応は比較的弱い可能性がある。両市でお話を伺っていると、こういった自らの特性を理解しながら、互いに持てるものを出し合っていくような自治体関係が望まれているように感じた。

飯田においても尼崎においても、キーワードとなるのはやはり「学び」である。より質の高い市民住民の「学び」が行われるべく、飯田市と尼崎市が互いに「学びあって」いる。このような相互発展的な関係が今後も続いていくことに期待し、両市の未来に注目していきたい。

謝辞

本稿の執筆に際しまして、大変お忙しい中お話を伺お聞かせくださいました飯田市公民館の木下様、ならびに尼崎市役所の奥平様、船木様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献・資料、Web ページ

飯田市ホームページ「解体新書塾の全記録」入手先 URL : https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/29494_57459_misc.pdf (アクセス日 : 2017-1-29)

寺中作雄『公民館の建設』公民館協会, 1946.

牧野篤『人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが結びつくこと—』, 大学教育出版, 2012.

「みんなの尼崎大学」Facebook ページ 入手先 URL : <https://www.facebook.com/ucmamagasaki/> (アクセス日 : 2017-1-31)

「みんなのサマーセミナー」ホームページ 入手先 URL : <https://samasemi.jimdo.com/%E6%8E%88%E6%A5%AD%E5%86%85%E5%AE%B9%E3%81%AF/> (アクセス日 : 2017-1-31)

R. M. MacIver『コミュニティ：社会学的研究；社会生活の性質と基本法則に関する一試論』[Macmillan and Co., Limited, 1917, 3rd ed., 1924.] 中久郎・松本通晴 監訳, ミネルヴァ書房, 1975.